

# W. F. ロイド価値論考

上宮 正一郎

## 1. はじめに

近年W. F. ロイド (William Forster Lloyd, 1794-1852) が再び注目を浴びている。限られた共有資源 (共有地) に関して、経済主体が自己利益追求 (経済合理) 的な行動を行うとすれば、その共有資源は社会的な最適水準を達成しえず、長期的にシステムを維持することは不可能であるという、市場の失敗に関する「コモンズの悲劇」(あるいは「共有地の悲劇」) のアイデアの先駆者としての評価である<sup>1)</sup>。彼の名前が経済学史上で特に注目され、光を当てられたのは、1903年のE. R. A. セリグマンの『エコノミック・ジャーナル』誌上の論文「忘れられた経済学者たち」によってであった。セリグマンは「限界価値理論として今日知られているものを提出し、価値が限界効用に依存することを説明することにおいて、いかなる国を問わず、最初の思想家であったという誇るべき地位<sup>2)</sup>」を占めるものとしてロイドを評価し、彼を歴史上の忘却から救い出した。その後、若干の例外を除くと、彼の学説はそれ自体としては必ずしも十分に検討されることなく、セリグマンの解釈はそれ以降経済学史では「限界効用理論」の先駆者として、ほとんど詳細な検討もないままに、通説的に受け入れられてきた<sup>3)</sup>。

- 
- 1) これは周知のように、Hardin, G., 'The Tragedy of the Commons', *Science*, 162, 1968が嚆矢となったものである。
  - 2) Seligman (1903) p. 363, 73頁。シュンペーター (Schumpeter, 1954) はセリグマンの功績を高く評価しながらも、セリグマンがロイドについて「いかなる国を問わず、最初の思想家であった」(p. 1055, n. 3, 2219頁, 注3) とした点では彼は誤っていたことを指摘している。
  - 3) その例として、ここでは、手近な経済学史関連の辞書におけるロイドの「価値に関する講義」あるいはそこでの価値論に関するの評価について、管見する限りでのみ紹介しておく。いずれも概観的なものである。「この講義は、知られている限りでは、効用と交換価値の関係を説明する限界分析の最初の適用を与えている。後の限界理論の用語を用いてはいないけれども、彼は全部効用と限界効用を明瞭に区別し、価値は商品の最終増分に対する欲望の圧力に比例することを示している。中心的なアイデアは非常に明快に説明され、例とアナロジーによって豊富に例証されている」(Harrod, 1933, p. 555)。「ロイドは彼のただ1つの残存する価値に関する講義において、シーニアよりも最大の明晰さと正確さで、限界効用理論を詳述した」(Bowley, 1967, p. 108)。「彼の価値に関する講義(1833年)は、限界効用価値論を明確にした最初の経済学者の一人として、ロイドを主導的な経済思想家たちに受け入れさせてきた」(Gordon, 1987, p. 219)。しかし、「[価値に関するロイドの] このより理論的な講義は限界効用逓減原理についての非常に明確な描写を含んでいる」(Blaug, 1986, p. 539)、として、それが限界効用価値論全体よりも、限界効用逓減法則の提示のみにとどまっていたことを明確に指摘している評価もある。また、「彼の価値の観念は、1870年代に展開された機会費用の考慮から切り離された、慣習的な限界効用理論とは直接的に同一化されえない。セリグマンはロイドの価値をW. S. ジェヴォンズの最終効用と同一化し、結果として、ロイドは彼の理論に効用タームで市場価格を説明させること(後の経済学者に関心を抱かせた問題)を意図していなかったという反応の攻撃をうけることとなった。/ロイド自身は交換の性質に関心を抱いた」(Levy and Peart, 2004, pp. 684-685) という、セリグマンへの辛口の評価もある。

こうしたロイドの業績評価はいずれも彼がオクスフォードのドラモンド講座経済学教授（就任期間1832年-1837年）として行った経済学講義の内容に関する検討から生まれたものである<sup>4)</sup>。この講座担当者には各年の講義内容の一部を印刷して公表することが義務づけられたことに伴い、ロイドも彼の就任期間中の各年度に行った講義の一部を公表した。それらの講義は以下の通りである<sup>5)</sup>。

Two Lectures on the Checks to Population, delivered in Michaelmas Term 1832<sup>6)</sup>.

A Lecture on the Notion of Value, as distinguishable, not only from Utility, but also from Value in Exchange, delivered in Michaelmas Term 1833.

Four Lectures on Poor-Laws, delivered in Michaelmas Term 1834.

Two Lectures on Poor-Laws, delivered in Hilary Term 1836.

Two Lectures on the Justice of Poor-Laws, and One Lecture on Rent, delivered in Michaelmas

- 
- 4) この講座は、政治・社会・宗教問題に強い関心をもつロンドンの銀行家であった H. ドラモンド (Drummond) が経済学教育の必要性・重要性の認識から、オクスフォードに講座を寄贈し、1825年にイギリスで最初の経済学講座として創設されたものである。ロイドは、W. N. シーニア (Senior, 1825年-1829年在職)、R. ホェートリー (Whately, 1829年-31年在職) について、この講座の第3代目の教授であった。この講座の開設・担当の条件は次のとおりであった。年俸は100ポンドで、「教授がM. A. もしくはB. L.の資格者であること」、「任期は最大限5年間であること」、「講義内容の印刷が義務づけられたこと」、「講座の開講回数が年間9回であること」、「最小限3名の聴講生がいること」(井上琢智, 1987, 65頁)であった。ちなみに、ロイドの前任者ホェートリーがダブリンのトリニティ・カレッジに1832年に開設した経済学講座(いわゆるホェートリー講座)もこれにならった。cf. Smith (1935), pp. 20-21, および上宮正一郎「ジェヴォンズと経済学の制度化」『経済学研究年報 48』(神戸大学), 2001, 33頁。
- 5) これらの講義内容は、彼の退職後まとめて、*Lectures on Population, Value, Poor-Laws, and Rent: delivered in the University of Oxford during the years 1832, 1833, 1834, 1835, 1836, by the Rev. W.F. Lloyd, Roake and Varty, 1837*として、公表された。これは現在ではAugustus M. KelleyによってLloyd (1968)として、そのままプリントされている。
- 6) この講義はハーディンの「コモンズの悲劇」の先駆としての重要性のために、Lloyd (1980)として、プリントされた。そこでは、ロイドの簡単な経歴の紹介に続いて、次のようなコメントが付せられている。「この講義は「人口の抑制に関する2つの講義」のタイトルの下に、オクスフォードで1833年に公表された。これらの講義の最初の部分において、ロイドはマルサスの人口理論のコアについての透徹した説明を与えているだけでなく、食料の不足によって表される人口に対する抑制と、「この不足とは全く独立した道徳的・物理的事情に起源をもつ」諸原因によって表される抑制との間に明瞭な観念的区別を導入することによって、マルサス的な分析を意義深く前進させている。しかしながら、人口問題についてのロイドの議論の主要な独創的貢献は、「社会の構成が、個人的な行為の効果をそれが関わりをもつ諸個人のものとするのではなく、社会全体に拡散するようなものであるときに」、結果として生じる有害な帰結についての彼の認識と鋭い分析である。ロイドのこの問題についての議論——ガレット・ハーディンの影響力ある『サイエンス』誌における1968年の論文「コモンズの悲劇」を通じて多くの現代の読者に最も知られている——は、人口政策に関して現在論争されているおそらく中心的な問題であるものの輪郭を描いている」(p. 473)。

Term 1836<sup>7)</sup>.

このように、ロイドの講義は1833年の「価値観念に関する講義」を除けば、人口問題や救貧法、これと関連しての地代問題といった、当時のイギリス社会での焦眉の政策問題や経済学者たちの間での論争に関連していた。これらの講義では、抽象的なモデル分析や演繹的推論が行われ、後に見るように価値・分配をめぐる理論的考察も散在的に組み入れられているが、現実・経験的、政策的指向が強く、また、当然ながら、T. R. マルサス (Malthus) を含めてこれらに関する当時の理論や論調、風潮を強く認識・意識した内容を展開している。

ロイドの生涯や経歴、活動については残念ながら現在でもその概略しか知られていない<sup>8)</sup>。彼は1794年にロイド家の三男として生まれ、ウエストミンスター・スクールで教育を受けたあと、1812年にオクスフォードのクライスト・チャーチ・カレッジに入り、数学と古典で優れた成績を上げ、1815年に卒業した。1818年にM.A.を取得、その後そのクライスト・チャーチ・カレッジでギリシャ語のリーダー (1823) および数学のレクチャー (1816-1824) となり、任期途中でダブリンの大主教となったホェトリエをついで1832年にドラモンド講座に就任した。1834年には王立協会のフェローにも選ばれた。彼の兄チャールズ (Charles Lloyd) は当時のオクスフォードの知的風潮を二分した、オリエル・カレッジのホェトリエらのリベラル・グループ (Noetics) に対抗したクライスト・チャーチの高教会派グループの中心的人物であり、欽定神学教授やオクスフォード主教を務め、ロバート・ピール (Robert Peel) との親交も深く、彼に影響を与えた<sup>9)</sup>。ロイド自身も聖職者の地位についていたが、なんら注目すべき活動は行わなかったようであり、体が脆弱であったこともあり、講座の任期を終えると退職し、その後は隠遁生活をおくったようである。

さて、本稿の検討対象とするのは、セリグマンによって注目されたロイドの1833年の「効

7) なお、ロイドにはドラモンド講座就任前の著作として、*Prices of Corn in Oxford in the Beginning of the Fourteenth Century: Also from the Year 1583 to the Present Time* (Oxford, 1830) があり、彼のデータは後にドラモンド講座を占めたジェームズ・E. T. ロジャーズ (Rogers) の著作 [*A History of Agriculture and Prices in England* 6] (Oxford, 1887) に組み込まれた (Romano, 1977, pp. 418-420)。これは、彼がドラモンド講座に就任以前にも経済学や貧困・貧者問題に関心を抱き、価値論を除く諸講義にも見られる統計的・経験的アプローチに好意的であったことを示しており、人口や地代に関する講義での抽象的モデルによる演繹的考察を合わせると、「ロイドは抽象的・演繹的アプローチと歴史的・経験的アプローチが競争的であるよりも補完的な方法であることを知っていたように思われる」(p. 420)、と彼の方法的態度をローマーノは説明している。

8) Blaug (1986) ; Clerke (1909) ; Clerke, rev. Yosioka (2004) ; Gordon (1987) ; Harrod (1927, 1933) ; Levy and Peart (2004) ; Romano (1975, 1977) ; 森 (1982)。ロイドの経歴に関して、経済学史辞書類・研究論文から管見したものは以上であるが、その生涯については不明な部分が多いこともあって、いずれもごく概略的なものにすぎない。

9) チャールズ・ロイドおよび当時のオクスフォードの知的雰囲気については、Romano (1977), pp. 414-418に詳しい。

用からだけでなく、交換価値からも区別されうる価値の観念に関する講義<sup>10)</sup>」(以下「価値観念に関する講義」と略記)である。これはこの年度のみカエルマス学期に行われた彼の講義の一部である。これまでロイドの業績全体に関する研究は極めて数少ないが、その通説的評価にもかかわらず、彼の価値論に関しても同様に、管見する限りでは、セリグマン以後ではロマーノ (Romano, 1977) やゴードン (Gordon, 1966), ボーレイ (Bowley, 1972) のロイド研究の一部としての検討を除けば、詳細・本格的な紹介・検討としてはわが国の森 (1982) が唯一といってよい<sup>11)</sup>。このような事情を考慮して、以下、その主要内容を詳細に紹介・検討することにする<sup>12)</sup>。

## 2. 「価値観念に関する講義」

先に触れたように、ロイドの1833年の「価値観念に関する講義」は、ドラモンド講座の規定によって、ロイドが就任2年目のみカエルマス学期に行った講義コースのうちの1回分が公表されたものであり、この年度の講義の全容は明らかではない。しかし、この講義での冒頭の次の文章が示すように、前回での効用概念およびアダム・スミスの価値論についての検討・解釈を受けた後で行われたものである。「前の講義において、私は、最初に、効用という主題について論じ、その後でアダム・スミスが価値という用語を適用した意味の考察に進み、他方交換価値の真の尺度に関して調べた。それから、彼はそれ [価値] によって、ある対象物の保有が伝える他財を購買する力——その意味するところは、異なる対象物の比較、それ故それらの関係を必然的に含む——を一般に意味させることができず、その文脈は明確で絶対的な (positive and absolute) もの——それだけでかつ他の対象物に関連なくとられた単一の対象物に属するものと理解可能であるもの——に言及しているように思われる、ということを示そうと努めた」(p. 5)<sup>13)</sup>。具体的には、ロイドは、スミスの「いく

10) この講義内容は、セリグマンの評価を受け、講座の後継者であったE. Y. エッジワース (Edgeworth) の提案に基づいて、1927年にR. F. ハロッド (Harrod, 1927) によってリプリントされた。ちなみに、ハロッドはロイドのこの価値論の内容について、次のようにコメントしている。「『価値の観念』に関する、かくして印刷された第2番目の講義において、ロイドはジェヴォンズ的な最終効用の概念を先取りした。ジェヴォンズはトランペットの響きとコペルニクス革命の暗示をもってそれを世界に与えたが、ロイドは出版の理由として規則上の要件を申し立てたにすぎない。学識はロイドの謙遜の被害を被った」(p. 168)。

11) 本稿はこうしたロマーノ、ゴードン、ボーレイ、とりわけ森に強く負っている。

12) なお、ロイドの価値論を除く諸講義の検討については、すべての講義を対象としたロイド研究であるロマーノ (Romano, 1977) があり、1836年講義を主に対象としたものとしてゴードン (Gordon, 1966) とロマーノ (Romano, 1971) がある。ゴードンはロイドの1836年の講義にマルクスの資本主義批判の先駆性を見出すが、ロマーノは「規制された資本主義の擁護者」(Romano, 1971, p. 258) の立場にあるとして、これを否定し、ギルバート (Gilbert, 1986) もロマーノを擁護している。

13) 以下、「価値の観念に関する講義」からの引用は、A.M. Kelleyのリプリント版に収録されたもののページ数を引用文の末尾に付することにする。

つかの特定の文章の吟味から、少なくともそれらの文章においては、彼はその用語を、ある対象物のそれを保有する人に対する真の重要性という意味において使用しており、また彼はこの重要性を獲得の困難さに依存させた」(pp. 5-6) ことを説いたようである。この講義ノート末尾にはスミス『国富論』の第1編第8章および第5章からの文章の引用とこれに関する彼のコメントが付せられており、これが彼の上記の説明の一部を成すものであることは確かであり、これから前回講義の内容の一部をある程度窺い知ることができる。「価値観念に関する講義」は、これを受けて、「この主題に関する一層の考察」(p. 6) に当てようとしたものである<sup>14)</sup>。

### 「欲望」

この講義において、ロイドはまず人間の「欲望」の分析からはじめる。当時の一般的供給過剰をめぐる論議を背景に、彼はある種類の商品の供給過剰、すなわち部分的供給過剰は起りうることであることを認める。しかし、彼は一般的過剰の可能性の論議に深く立ち入ることなく<sup>15)</sup>、それを否定する側から提出された議論の検討という立場から、人間欲望の無限性の問題を論じていく。「人類の願望にははっきりした限界は、実際上は、存在しない。(中略) 富に対する熱情は、現存の諸欲望の満足とともに拡大するし、絶対的に無制限ではないとしても、少なくとも、無制限であると呼ばれてよいかもしれない」(p. 7)。それは「諸欲望の種類を増大」(p. 8) によるものである。しかし、「人間の諸欲望を満足させることができる対象物が、その種類の数において限定されているとすれば、それらはそれ自体真でさえないだろう」(p. 8)。「野蛮人の諸欲望は、食料や衣服のような最も必要な商品の若干、また彼らが十分にはもたないこれらの商品の若干に制限される。(中略) 彼らの諸欲望の目録が不変にとどまり得るとすれば、彼らの現存の諸欲望が十分に満たされる諸手段を考えることは困難ではない」(pp. 8-9)。このことは同様に文明人にも妥当する。「数量の増加がついにはある特殊の欲望対象物への需要を汲みつくす、あるいは可能な限り満足させるだろう」(p. 9)。「富

14) なお、ロイドの「価値に関する講義についての個人用の本」(オクスフォード講義の1837年印刷の本)がシカゴ大学図書館で発見され、そこに閉じはさまれた別個の紙片に彼の筆跡で価値に関する講義への注が記されているようである。それは「ロングフィールド (Longfield)、シェークスピア (Shakespeare)、および18世紀の経済学的でない文献の参照とそれらからの引用を含んでいる」が、そこには「何ら新しいアイデアはない」(Romano, 1977, p. 441)、と言われている。

15) ロイドは一般的供給過剰に対する態度をここでは必ずしも明確に示していないが、「[批判する立場からの] これらの議論は、消費の傾向とよりも生産者の報酬と関係するところの諸商品の供給過剰に関する主要な問題に直接的には関係がないと合理的に主張し得るけれども、諸命題それ自体の一般的真理をだれも疑うことはできない。例えば、この国のすべての人々の集計的所得が10倍に増加するとしても、彼らはそれを処分するのに困難を見出すとは誰も主張できない」(pp. 7-8) と述べている。なお、Romano (1977, p. 437, n. 103) によると、E. G. ウェイクフィールド (Wakefield) がスミス『国富論』に関する彼のノートで、富に対する熱情に関するロイドの陳述を引用しているようである。

に対する熱情を不確定にかつ飽くことを知らぬようにさせるのは、欲望の無限の多様性と、欲望の満足に必要な商品の種類の無限の多様性とである。論理学者のいう最下層の場合には、願望は制限されている」(p. 9) と言うべきである。

こうして、ロイドは、諸欲望の限定性とそれを満たす対象物の稀少性を考察の前提において、「数量の増加がついにある特殊の願望対象への需要を尽くし、あるいは可能な限り満足させる」(p. 10) 場合、何が生じるかについての検討に入っていく。

#### 「欲望、価値、効用」

先ず価値論の前提となる欲望についてこのように説明した後、これを基点にロイドは「価値」の考察に進んでいく。この欲望あるいは需要が十分に満たされるとき、「すべての商品の場合に、その価値は満足のまさにその瞬間に消えることが見出される」(p. 10) として、次の説明を加える。

「それが豊富であるという理由によって、ある特殊な事情の下を除くと、水は無価値であるか、ほとんどそうである。すべての人は、彼がそれを適用することを望むすべての目的にとって十分な以上のものを支配する。それ故、彼はその使用において儉約する理由をもたない。もし現在の機会を満足させた後に何らかのものが残るとしても、彼はそれを保蔵したり、あるいはその財産を作ったり、あるいは他人がそれを使用するのを妨げたりする理由をもたない。私がこれらの詳細なことを言うのは、それらが存在するところでは、それらは価値を確かに指示するものであり、価値の強度はそれらの強度に従うからである。われわれは価値ある対象物の使用において儉約しているが、それは、われわれがかくしてそれを長く続かせることができるからである。そして、われわれはそれを長く続かせることを望むのは、費やされ消費されると、それは容易に取り戻すことができないである。同じ理由のために、われわれはそれを保蔵し、それを占有し、他人がそれを使用するのを妨げる」(p. 10)。

こうした「対象物の保有を維持し、保有するというに存する理由のなかに、価値は本質的に存在する」(pp. 10-11)。価値の本質は欲望の満足に存するものである。欲望の満足は「価値を確かに指示するもの」、「価値の強度」と結びつけられる。価値はこれまでも「ある対象物に与えられる評価 (esteem) を意味すると極めて適切に定義されてきた」(p. 11) とロイドは説明するが、これはマルサスのみならず、スミスについての彼の解釈を意味しているものかと思われる。

このことを一層理解できるようにするために、彼は以下の具体的例証を述べる。

「1オンス、ただ1オンスの食料のみを支配する空腹の人の場合を想定しよう。彼にとって、この1オンスは明らかに非常に大きな重要性をもっている。彼が今2オンスをもつと想定しよう。これらはやはり大きな重要性をもつ。しかし、第2番目の1オンスの重要性は単一の1オンスのそれに等しくはない。換言すれば、彼はその2オンスのうちの1オンスを手放し、1オンスを自分自身のために保有することからは、彼が1オンスだけをもち、その1オンスを手放し、そして何も保有しないときに彼が損害を被るほどは、損害を被ることはないだろう。第3番目の1オンスの重要性はさらに第2番目の第1オンスよりは小さい。そして、第4番目の1オンスについても同様であり、ついには（中略）食欲が全くあるいはほぼ失われる点にまで、そして単一の1オンスに関して、それが手放されるか保有されるかは無差別の問題になる点にまで、われわれは到達する。かくして、食料を乏しく供給される間、彼はその一部分に大きな評価を与える。——換言すれば、彼はそれに大きな価値をおく。彼の供給が増加するとき、一定量に対する彼の評価は減少する、換言すると、彼はそれにより小さな価値を与える。」(pp. 11-12)

欲望の満足、欲望を満足させる対象物に与えられる重要性・評価、すなわち価値は、対象物の数量とともに逡減していく。ここでの彼の説明は価値が欲望満足に存することを説明するのが主旨であるが、後に展開される「限界効用逡減法則」を予示したものとなっている。

ロイドはこれに引き続いて、アナロジーを用いた欲望の区別・価値と欲望についての議論に移り、彼の主張を深化させていく。満たすべき欲望にはさまざまな種類があるが、ロイドは各欲望をさまざまな強度をもつ時計の「ぜんまい」に例える。

「さまざまな欲望は、それらのいくつかの違いに応じて、さまざまな程度の強さのぜんまいによって表される」(p. 13)。この場合、人間の必需品である食料が満足させる欲望、水への欲望、必需品でないものへの欲望などを比較していくと、前者ほど大きな強さのぜんまいに例えられる。「人工的な欲望に移っていくと、われわれはその強度にしたがって、さまざまな強さの程度のより小さなぜんまいによって、それらを表しうだろう」(p. 13)。これは、「時計の主ぜんまいがひげぜんまいよりも強いと言うときのように、それらを絶対的に比較」(p. 14)したものであり、「絶対的と考えられた、対象物が供することのできる諸欲望の重要性によって、対象物の効用を評価」(p. 14)する場合である。水はそれが豊富な陸上にある場合以上に、稀少な海上の船中において、有用さにおいてまさるわけではない。また「穀物の効用は、豊作のあとでも、飢饉のときと同一である」(p. 15)。

しかし、いま一つのぜんまいの強さを比較する方法が存在する。それは「それらの現実の諸条件のある決まった修正下でのそれらの拡張力を比較」(p. 14)する場合である。この場合は、「すでに部分的に拡張しているぜんまいが一層自ら拡張する傾向」(p. 15)に相当する。

すなわち、「ぜんまいの拡張傾向はその現実の拡張の程度のすべての変動とともに変化する」ように、諸欲望は「商品の数量、また絶対的な欲望が満足される程度の結果として生じるすべての変動とともに変化する」(p. 15)。のどの渇きのない人よりも、渇きでほとんど死にそうな人によって、水はより欲望される。そして、「最も有用な商品についての欲望は最も有用でない商品についての欲望より小さいこともありうる」(p. 16)。

価値が関連するのは、この後者の場合の欲望の評価である。「価値が依存するのは、このようにして評価された欲望にである」(p. 16)。「それは欲望と同一物ではないが、それに比例し、それから生じる。ある対象物の使用から引き出される満足は、このように評価された、その欲望に等しいものと受け取られねばならない」(p. 16)。かくして、「価値は、正しく言えば、対象物の損失に伴う満足の損失という意味から生じる、その対象物に対する愛着 (affection) の感情あるいは評価」(p. 16)であり、その究極的な意味において、価値は「疑いなく心の感情を意味し、それはいつも満足された欲望と満足されない欲望の間の分離の限界に現れる」(p. 16)<sup>16)</sup>。

これを説明するために、ロイドは先に引用した食料の場合と類似した例示を与える。

「すでに半ダースのコートをもっている人に、あなたがもう1着を与えることを申し出るとすれば、彼はおそらくそれは何の役にも立たないと答えるであろう。しかしながら、ここでは、彼はコートの抽象的効用 (abstract utility) についてではなく、彼のコートの欲望がすでにこれまでに供給されているという状況下での彼にとってのその特殊効用 (special utility) について、彼は話すのである。これは、価値と全く同一物というわけでないけれども、それに非常に近く接近する。そのコートは彼にとって何の役にも立たないであろう。それ故、彼がそれをもったとしても、彼の評価においては価値をもたないであろう。彼はその保有を続ける理由をもたないか、あるいは、それを失うとしても、その損失を残念に思う理由をもたないであろう。しかし、これは効用の一般的意味におけるコートの効用とは非常に異なるものであり、それと混同されるべきではない。」(pp. 17-18)

ロイドにおいては、「効用」の概念は「対象物が供することのできる各欲望の重要性」(p. 14)として欲望と結びつけられるものではあるが、価値に関しては、それは限定されねばならず、一般的意味の効用とは区別されねばならない。「その対象物が属する種類全体」(p.

16) ここで展開されている「ぜんまい」のアナロジーによる説明は、いわゆる「価値度盛表」を用いての「主観的契機」(「個々の欲望満足の意義の大きさの差異」と「客観的契機」(「個々の欲望満足の具体的諸財への依存性」)の区別による、後の『国民経済学原理』(Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 1871)でのC. メンガー (Menger) の価値論展開のアプローチを思い起こさせる。また、いわゆる「損失原理」での価値の説明もメンガー的である。



18) にかかわる効用は価値とは関係しないものであり、価値に関わるものと区別されねばならない。ロイドはここに至って、前者の絶対的・一般的な意味における効用を「抽象的効用」、後者の一定の状況下における効用を「特殊的効用」と名づけて、両者を区別すべきことを強調する。後者の意味の効用、「特殊的効用」だけが価値と結びつけられるものである。例示からも明らかのように、「特殊的効用」は「満足された欲望と満足されない欲望の間の分離の限界に現れる」(p. 16)のものであり、限界的概念であり、今日の「限界効用」に相当するものと言ってよい<sup>17)</sup>。そして、先の食欲に関する例示に見られるように、この「特殊的効用」はある一定の欲望に関して、それを満足させる対象物の数量の増加とともに逡減するものである。以上を総括してロイドは次のように説明する。

「数量において無制限ではあり得ない保有されている対象物に価値は付着する。それ故、価値のアイデアを得るために、以前同様に、種類全体ではなく、一定の明確な数量の保有のみを奪われると自分自身で想像せよ。例えば、再び水の手桶の場合をとり、それがひっくり返されると想定せよ。そのときその価値は、それが供給されることが意図された特定の欲望が満足されないままにとどまると想定して、感じられる不便によってか、再び井戸に行く労苦によってか、どちらが最小であるかによって、評価できるであろう。(中略) 保有されている水はほとんどいつもある価値をもつ。しかし、この価値は、通常の場合下では、小さいし、交換の労苦に等しくはない。そして、このために、水はめったに交換の対象にならない。」(p. 19)

ここには欲望が満たされない場合に、価値は満足面である「感じられる不便」と主観的費用面である「再び井戸に行く労苦」の両面で捉えられている。このことはこの水の保有者の心中でこれらが比較されるとの認識があることに注目せねばならない。

#### 「価値と交換価値」

ロイドは、さらに、価値を交換価値とも区別すべきことを強調する。「この講義の過程で、私は水について価値がないと語ってきたし、またそれは全く価値のない非常に有用な商品について普通あげられる例であるけれども、これは交換価値についてのみ理解されることであるということを、ここで述べておこう。所有されている水はほとんどいつもいくらかの価値をもつ。しかし、この価値は、通常の場合下では小さいし、交換の労苦に等しくはない」(p.

17) 後にJ. B. クラーク (Clark) が『富の分配』(*The Distribution of Wealth: A Theory of Wages, Interest, and Profit*, 1924) において、「限界効用」に相当するものを同じく「特殊的効用」(special utility) と呼んだことは興味深い。

19)。価値は「それを所有する人に対する対象物の真の重要性」(p. 20)であり、「私がこの前の講義で言及したように、アダム・スミスの文章から集められる定義である」(p. 20)とも、繰り返し述べる。

この両者の区別の必要を説くために、孤立したロビンソン・クルーソーの場合および交換が発達したイギリスのような社会の場合を例に、価値と交換価値は別物であり、価値は交換に依存するものではないということをロイドは説明する。

ロビンソン・クルーソー物語から引用して、彼が大麦を栽培した場合、「彼は単に穀物の効用についてだけでなく、価値についての感覚」(p. 20)を示していると説明する。また、軍艦の中では、銀は火薬と等しい価値はもたないと述べたJ. ロック (Locke) や、(公表した講義の内容の注においてだが) 価値と富あるいは交換価値を分離して考えているR. トレンズ (Torrens) をも合わせ紹介して、自らの考えの正当性を主張する。

「一般に、交換なしに存在する価値の例を見つけるためには、われわれはただ多数の所有物の取引を排除しさえすればよい。(中略) ロビンソン・クルーソーのような孤独な個人の場合には、そのときには交換すべき人は誰もいないから、交換は存在し得ない。さらに、分業が確立されておらず、各人が多様な仕事にかかわり、消費するいかなる物品も彼の家族のために獲得し準備する国においては、物々交換と販売、そして結果として交換価値は知られないだろう。それでも、これらの物品は価値があるだろう。——それらは交換可能ではないけれども、それらを保有する人にとってそれらの保有は重要性をもつだろう。(中略) 同様に、外部的な交易をもたない社会においては、多数の財産がないために、交換価値は存在し得ないだろう。われわれは贅沢品、快適品、生活必需品を多かれ少なかれ豊富に自らに供給するような社会を想像し得るだろう。しかし、これらは、交換可能ではないけれども、もしすべての欲望の十分な供給には不十分な程度に生産されるとすれば、価値を欠くことはないだろう。」(pp. 24-25)

スミスが人間の「交換性向」に関しての説明において触れた「犬の間の骨の交換」の例示を見ても、価値は交換とは分離されるものである。犬が骨を隠すのは、「犬が交換価値の感覚ではないが、価値の感覚をもっている」(p. 26) からである。「犬は単に効用の感覚から、換言すれば、彼が骨を好むからそれを行うのではなく、骨は欲求されるときにいつでも手に入れられるものではないものであることを知っているから、行うのである」(p. 26)。そして、交換が生じるためには、この価値の感情だけでなく、「財産権を理解し、相互に認めることが必要」(p. 26) な前提となる。われわれの日常生活においても、交換とは関わりをもたない価値の例を見出すことができる。たとえば、注文で作られたコートは、注文した人にとっ

てはそのコートは有用で価値があるが、それを作った人にとってはそうではないだろう。「その所有者の評価において商品をより価値あるものにする同じ作用は、他のすべての人々の評価においてはそれを価値の少ないものにし、それ故、より小さな交換価値をもつものと理解される」(pp. 27-28)。

彼が「価値」と呼んできたものは「比較的価値あるいは交換価値」とは区別される、その対象物そのものに付着する「絶対的な」価値、「絶対的価値」である。かくして、ロイドは以上を次のように総括する。

「このようなものが比較的価値あるいは交換価値 (comparative or exchangeable value) とは区別される絶対的価値 (absolute value) の観念である。それはある対象物を保有する人にとってのその真の重要性を意味し、この意味において、ある対象物が明示的あるいは含蓄的な他の対象物に関連することなく価値において変動するといかにして言うことができるのかが理解するのは確かに容易である。飢饉のときに、穀物自体が豊作のときにおけるよりも価値があるといかにして言われるのかをわれわれは理解することができる。そして、労働がより効率的になり、従ってすべての種類の商品が人類の諸欲望に比例してより大きな豊富さの程度に生産されるようになるとすれば、すべての種類の商品は、互いに以前と同じ割合で交換可能であるけれども、価値が小さくなったといかにして言うことができるのか、をわれわれは理解できる。」(p. 28)

価値は所有物が稀少な状況下においてそれを欲望する当該の個人にとってのその対象物の重要性・評価であって、その数量によって変化するものであり、個人的・主観的価値である。交換対象物間において成立する比較的価値・交換価値とは別物であり、当該対象物の数量の変化と個人の欲望との関係で生じるものであるという意味で絶対的なものである。

#### 「価値の測定」

こうした価値の観念には、効用同様、その測定に関しては問題があることを認める。しかし、それ故に、以上述べてきたことは否定されるものではないことをロイドは強く訴える。

「実際には、それによって単一の対象物の絶対的効用、あるいはさまざまな対象物の比較的効用の精確な比率を測定する何らかの正確なテストを発見することは、困難である。それでも、効用の観念は物の性質に基礎をもたないということにはならない。あるものが測定可能ではないので、それは真の存在をもたないということにはならない。熱の存在は、現在同様、温度計が発明される以前にも否定されはしなかった。そして、単独で考えられ

るある対象物の価値というアイデアは、把握するのが困難であるので、それ故それは独立した存在をもつことができない、ということにはならない。」(pp. 29-30)

もちろん個人の心中では特殊効用である価値の比較は可能であり行われるのであるが、ロイドはその価値を精確に測定すること自体は困難であり、比較することも困難であることは認めている。このことはこの価値の個人間比較は不可能なことを含蓄している。しかし、一方では、これに反するように、価値の個人間比較を認めた説明も見出される。

「価値のこの意味において、同じものが貧しい人に対しては、富裕な人に対してよりも価値がある、と述べられるであろう。そして、この意味は日常的な会話におけるこの用語の使用と一致する。」(p. 28)

「効用、価値、内在的価値」

商品の価値は対象物に付着する「絶対的価値」であることを示してきたロイドは、これと「内在的価値 (intrinsic value)」(p. 30) を区別しなければならないと説く。両者は混同されがちであるが、絶対的価値と内在的価値は異なるものである。

「内在的価値は対象物自体に固有の価値を意味するが、対象物が同一であるにとどまる間は必然的に同一にとどまらねばならず、対象物の内部的構成と性質の変化によるのみ変化し得る。しかし、それが価値をもつ人に関連なしには、何物も価値があるとは言うことはできない。それ故、同一の商品は同一の内在的資質を保有するが、われわれが言及する諸個人の欲望の変化に従って、価値において変動し得るのである。それ故、価値という用語は商品に固有の資質を表すものではない。私が以前に説明したように、価値は心の感情を表し、その対象である商品の内在的資質の変動なしに、その感情に影響を与える外部的事情の変動とともに変化し得るのである。」(p. 31)

内在的価値は対象物自体に固有のもの、その内在的資質・性質であり、効用あるいは価値とは区別されねばない。

では、効用と内在的価値はいかなる関係にあるのか。効用は価値と同じく「絶対的なもの」(p. 32) であり、絶対的価値同様に「不明確であり、ほとんど測定不可能である」(p. 32)。この点で両者は類似する。効用は人間の諸欲望に関連する対象物についての概念であり、「効用は価値同様に内在的なものでない」(p. 32) し、効用自体もおかれた状況下に依存する。というのは、たとえば毛布はイングランドでは有用であるが、暑い気候のところではそれほ

ど有用ではない。氷は夏には有用だが、冬には無用である。この点で、効用と内在的価値は異なる。「毛布の内在的資質と氷の内在的資質は、いつでも、またすべての場所で、同一である」(p. 32) からである。効用は対象物の内在的資質ではなく、人間の欲望と関連するものである。そして、価値は欲望対象物の数量と諸個人の具体的な欲望のあり方に依存するものであり、その意味で「特殊的」な効用である。

このように対象物の効用、価値、および内在的価値あるいは内在的資質の関係を説明するロイドも、「穀物の効用は、豊作のあとでも、飢饉のときと同一である」(p. 15) などという説明も行っており、効用と内在的価値の関係については明確性を欠いていることを指摘しておこう。

このように講義を展開してきたロイドは、彼の意図が価値の説明だけでなく、価値尺度の考察にもあったことを吐露している。「価値という用語の意味を説明するほかに、この講義で、価値尺度の問題をも考察すること、また時には労働が、時には穀物とその真実価値 (real value) においてほぼ不変であり、そのために他の諸商品の変動する価値を測定するために適していると想定されてきた根拠を私は吟味しようと意図していた。しかしながら、今日はこれらの問題に入る時間がないことを見出す」(pp. 32-33), と<sup>18)</sup>。

#### 「小括」

以上のようなロイドの「価値観念に関する講義」の内容を総括的に整理すれば、以下のようになる。人間のある欲望を満足させる対象物の数量が限定され、いわゆる稀少性が存在するときに、その対象物に対する評価、価値が生じる。「価値」は「ある対象物のそれを保有する人に対する真の重要性」(「ある対象物に対する評価」, 「評価された欲望」, 「対象物の損失に伴う満足の損失という意味から生じる、その対象物に対する愛着の感情あるいは評価」)

18) ロイドはこの回の講義を終えるにあたって、「価値は相対的な用語である」と主張している『ウェストミンスター・レビュー (Westminster Review)』を参照して、価値は相対的なものではなく、絶対的なものであることを改めて強調している。船の動きや天体の運動を陸地あるいは地球との間の相対的距離で表現される場合があるとしても、「すべての運動が相対的であると言うことは真実ではないように、すべての価値は相対的であるということは真実ではない、と私は主張しなければならない」(p. 37)。ここで参照されているのは、『ウェストミンスター・レビュー』1825年1月号のJ. S. ミル (Mill) (当時は匿名) によるレビューである。これは、*Supplement to the Encyclopaedia Britannica* におけるJ. R. マカロック (McCulloch) による「経済学」論文に対して、彼を含みリカードウ的な「新しい学派」の学説を批判した『クォーターリー・レビュー (Quarterly Review)』1824年1月号に掲載されたマルサス(当時は匿名)によるレビューを批判したものである。この両者のレビューは今日では、B. Semmel (ed.), *Occasional Papers of T. R. Malthus. On Ireland, Population, and Political Economy, from Contemporary Journals, written anonymously and hitherto uncollected*, B. Franklin, 1963の中で、後者はpp. 171-208 に、前者はpp. 211-230 に収録されている。

である。これを彼は「特殊的効用」という用語で表す。これは今日の「限界効用」概念に相当するものであり、それは数量の増加とともに逓減傾向を示す。この説明を行うために、ロイドは「価値」と「欲望」、一般的・抽象的意味での「効用」、「内在的価値」、「交換価値」との区別と関係について詳細に論じたものであった、とあってよい。

しかし、「限界効用逓減法則」の提示はあっても、ここでは「限界効用」に関わる説明に終始し、「総効用」自体への言及も見られない。また、少なくとも明示的には「限界効用均等法則」に関連する説明は見出すことはできず、個人の心中での満足と費用の均衡の示唆が見られるだけである<sup>19)</sup>。しかも、「この『講義』に関する限りは同一人による諸欲望間の比較や連関財の考察はない」<sup>20)</sup>。従って、今日「限界効用理論」という意味でわれわれが理解するもののすべての理論展開にまでは及んでいない、と言わざるを得ない。限界効用理論の展開による古典派批判とそれを基軸とした新しい理論体系建設の提唱を意味するいわゆる「限界革命」についてわれわれが語る時、「限界革命」トリオが限界効用による価値と価格決定との関連を論理整合的に説明しているか否かはともかく、「限界効用逓減法則」と「限界効用均等法則」の2つが提示され、それをもとに価格を説明しようとするアプローチを試みたことを意味している。この講義に関する限りでは、ロイドは価値と交換価値・価格との関連にまでは及んでいない。この意味では、「限界効用と市場価格との間の明確な関係を彼は展開していないので、ロイドの出版された講義は、セリグマンがかつて要求したように、効用価値論を含んでいるということとはできない」<sup>21)</sup>とすることができるであろう。少なくとも、ロイドのこの講義ではまだ「限界効用」を基盤とした消費者行動あるいは需要理論の展開までに至っておらず、それらと市場で決定される価格・交換価値との関連への言及も、それらが別物であるという指摘以外には見出せないのである。

#### 「スミスにおける価値のロイド解釈について」

以上がロイドの「価値観念に関する講義」における価値の考え方に関する彼の説明の紹介である。これに引き続いて、リプリントされた講義内容には、『国富論』からのいくつかの文章とそれに対する彼の解釈が付録として加えられている。講義の冒頭で語られた前回講義での内容の要約のスミス解釈に関連するものである。繰り返し引用すると、ロイドは前回講義で、スミスは価値という用語を「ある対象物のそれを保有する人に対する真の重要性という意味において使用しており、また彼はこの重要性を獲得の困難さに依存させた」(pp. 5-6) ことを説明した、と言われている。このノートは、これと関連して、全体としては、

19) cf. 「総効用を最大化するために一定の所得をいかに配分することができるかを示す消費者行動の理論を彼は展開していない」(Romano, 1977, p. 437)。

20) 森 (1982), 420頁。

21) Romano (1977), pp. 437-8.

ロイドの講義で説いた価値の観念がすでにスミスによっても採用されていたことの傍証的解釈に当てられている<sup>22)</sup>。

ここで彼はまず、第1編第8章冒頭近くからの文章を引用し、その解釈の仕方を説明する。スミスが分業の発展により生産力が増大し、すべてのものが少ない労働によって生産され、安価になるという説明部分である。

「しかし、すべてのものは実際に安価になる [実際に価値が小さくなる] けれども、外見上は、多くのものは以前より高価になる [外見上価値が大きくなる]、あるいは他の諸財のより大きな数量と交換されるだろう。例えば、大部分の仕事部門で、労働の生産力が10倍に改善された、あるいは1日の労働がもともと生産していた10倍の仕事量を生産することができる、と想定しよう。しかし、ある特定部門ではそれがただ2倍に改善されたにすぎない、あるいは1日の労働は以前の2倍の仕事量しか生産することができない、と想定しよう。大部分の仕事部門の1日の労働の生産物をこの特定の部門の1日の労働のそれと交換する際に、それらにおける元の仕事量の10倍がそれのもとの数量を2倍だけ購買するだろう。それ故、そこにおけるある特定数量は、例えば1ポンド重量は、以前よりも5倍高価に [5倍価値がある] ように思われるだろう。しかしながら、実際には、それは2倍安価になった [価値において半分に低下した] だろう。それを購買するには他財の5倍の数量を必要とするけれども、それを購買あるいは生産するにはわずかに半分の労働量を必要とするだろう。それ故、その獲得は以前の2倍容易であろう。」(『国富論』第1篇、第8章)

ここで [ ] 内の文章 (原文ではイタリック体) はロイドの付け加えたものである。ロイドによれば、スミスは、次のように述べているのだと解釈すべきである、とする。ここには「価値」という用語は見出せないが、「あるものは高価になる、あるいは安価になる」ということは、その価値は増加したあるいは減少したと言うことと疑いなく同一である。アダム・スミスは、想定された事情の下では、外観上は多くのものは高価になるけれども、すべてのものは真実には (in reality) 安価になる、あるいは、彼がそれを言い換えているように、以前よりもより大きな財数量と交換される、と説明している。ここには、「真実価値 (real value) と外観価値 (apparent value) の対立が明確であり、指摘され」(p. 39)、「いくつかの商品の交換価値が現実が増加するとき、価値の増加は外観的なものに過ぎないと宣言されている」(pp. 39-40)、と。しかも、ロイドは「真実価値はここでは獲得の困難 (difficulty of attainment) に依存すると仮定された」(p. 40) と付け加えている。

22) ロイドの講義内容を非常に詳細に紹介・検討した森 (1982) においては、この部分への言及や検討は明示的にはなされていない。

また、第1編第5章で、スミスが「広東での半オンスの銀で売れる商品は、そこでの所有者にとっては、ロンドンで1オンスの銀で売れる商品がロンドンでそれを所有する者に対してもつよりも、実質的にはより高価[すなわち、真により価値がある]であり、つまりより多くの真の重要性をもつかもしれない」(p. 40. [ ]内は同じくロイドによる追加)と述べているのも、同じように解釈されるべきであるとロイドは言う。しかも、それは、真実価値は獲得の困難に依存するという先の原理をスミスは前提にしてである。しかし、ロイドは、「この文章は真実価値の定義を含蓄し、それはそれを所有する人にとってのある対象物の真の重要性にあることを暗示」(p. 40)している、と解釈する。そして、「ある対象物のそれを所有する人にとっての真の重要性はこのような対象物を獲得する困難に依存する。それ故、実際には、これらすべての文章には、同一のアイデアが実質的に提示されている」(p. 40)、と締めくくっている。

このロイドの解釈は少なからず問題を含んでいるように思われる。引用した文章を、ロイドは、対象物が他のものとの交換上「安価になる」あるいは「高価になる」ように見えるのは、「外観的」にであって、「真実」には、それを手にする個人にとっては、価値が上昇あるいは低下している、と解釈すべきものである、とする。そして、その人にはその対象物の「価値」はそれをもつ「真の重要性」、「絶対的なもの」であって、外観的価値とは無縁であることを示唆していることが、このスミスの文章からも読み取れないし読みとるべきであるとするのである。すなわち、価値・「真実価値」と外観上の「交換価値」とは別物であり、あくまで「価値」は個人的なレベルで考えられるべきである、ということのスミスの説明も暗示ないし含蓄している、と。

これらの文章は、その文脈からしても、スミスにおいては交換上の価値あるいは価格について論じられたものである。しかも、ロイド自身が認めているように、ここではそれは「対象物を獲得する困難」に依存するものとされており、投下労働量ないし生産費によって決定されるものとして説明されていると読まれる部分である。生産量の増加に伴うその立場からの相対的価値・交換価値の説明、「(自然) 価格」の次元の説明である。ここでのロイドの解釈は、このスミスの文脈・説明の趣旨とは次元を異にし、あくまでそれが成立した際のその商品の購買者個人にとっての価値、しかもそれについての彼の立場からのスミス解釈にすぎない、と言ってよい。ロイドによれば、価値そのものは交換とは切り離して考えられるべきものであった。それにしても、「ある対象物のそれを所有する人にとっての真の重要性はこのような対象物を獲得する困難に依存する」(p. 40)、すなわち価値は獲得の困難に依存するという彼の説明の意味するもの、そして彼の言う「価値」との関係は、不明確である。その論旨の展開からスミスでは「獲得の困難」は、価値対象物の稀少性・数量制限の存在という意味での「獲得の困難」であるよりも、生産物増加の下での投下労働量・



生産費を意味し、ロイドもそれを容認しているように思われるからである。講義での価値の説明と少なくとも表面上は不整合であり、今回の講義自体では言及されていない要素に立ち入っている。ロイドの前の講義内容もこの年度の講義全体も公表されておらず、付録ノートのみではその解釈は困難であるが、ここには、ロイドの「特殊の効用」による価値論の提示がもつ経済学史上の位置を解釈する鍵があるように思われる。しかし、現在公表されているロイドの他の諸講義の中に散在的に見出される彼の価値あるいは価格の説明がそのヒントを与えてくれる。

### 3. 他講義における価値論関連論議

ロイドの価値論・価格論に関連する説明は、この1833年の講義内容のほかにも、公表された一連の講義の中にも散在的にはあるが見出され、特に、1836年のミカエルマス学期に行われ、翌年に公表された講義内容「救貧法の正義に関する2つの講義、および地代論に関する1つの講義」<sup>23)</sup>の中の説明は重要である。

この講義は、救貧法に関して、その原理を擁護しながらも、「貧者への救済は、正義ではなく、善意と慈善の純粋な問題である」(p. 5)という原理に対する反論として、企てられたものである。架空上の国と現実の国イングランドの区別によるモデル分析を通じて、ロイドは当時のイングランドでは労働者が次第に長時間労働することを強制され、しかも生存費水準以上の賃金を受け取ることができないということを説く。彼は「正義」の原理に立って、労働者の低い賃金を補助する手当は政府の本来なすべき正当な活動であると説く。それは、救貧法は過剰人口によって引き起こされる窮乏を軽減することはできないというマルサスの議論に同意しながらも、1834年に制定された新救貧法の行き過ぎに異論を唱えたものである<sup>24)</sup>。

その中で、ロイドは、労働者は実際には「彼の労働に対する完全な等価物」(p. 9)、「彼自身の労働の生産物の合理的な分け前か、あるいは彼がそれとの交換において与える彼自身の労働の数量に比例した他の人々の労働の生産物量」(p.10)を受け取るということを否定して、労働の価値＝賃金命題を否定した。この立場に立って、生産物が無料の贈り物であるという

23) ちなみに、1836年の講義へのAdvertisementによると、この講義では「救貧法の正義に関する2つの講義が最初に意図された」が、「第3の地代に関する講義は異なった主題ではあるけれども、他の諸講義で頻繁に言及された仮説を全体として含んでいるために付け加えられている」という。以下、この「救貧法の正義に関する2つの講義、および価値論に関する1つの講義」からの引用については、A.M. Kelleyのリプリント版におけるページ数を引用文末尾に付することにする。

24) この講義内容の趣旨については、ハロッドの次の要約が的確である。「人口の生存資料への圧力に関する主要なマルサスの立場は受け入れているが、にもかかわらず、寛大な救貧法システムを擁護すべき理由を見出し、(中略)1834年の救貧法修正法の本質、またその法律が代表する見解の波に全面的に反対した」(Harrod, 1933, p.473)。

「想像上の国」と「現実の国」イングランドの区別に立つモデル分析を行い、その展開過程において、次のような説明を行っている。

「以前の講義で私が説明したように、自然は人間に同一の収穫物の異なった部分を異なった価格で売り、生産物への最後の増分は、私がまた説明したように、その働きによってそれらを栽培する労働者の維持に十分な以上であることはほとんどない。しかし、生産物の他のすべての部分に関しては、自然はもっと気前がよいが、それにもかかわらず生産物の全体はその極端な部分に対して自然によって要求される最高価格で人々に売られる。(中略)

このことは、私を価値が決定される諸原因についてのある見解に導く。価値は生産費に存するとしばしば漠然と言われる。価値は、実際、現存の供給が増加され得る費用によって制限されるが、その供給の主要部分が現実に生産された費用とは何の関連もたない。それがその稀少性に影響を与えるに応じて、生産費は商品の価値に影響を与えるだけであり、稀少性は現実の供給への次の増分を生産する費用によってのみ影響を受けるのである。」(p. 62)

「土地の占有に関して、食料の価格の共通水準は、一部分のみ生産費と一致するが、他の部分ではそれよりもはるかに上に高められ、地代に転換される差違を残す。」(p. 64)

「地代は一定の状況下で、食料を獲得するある所与の肥沃度の制限と人口との衝突から生じる、結果である」(p. 82)

さらに「地代に関する講義」でも、次のような説明が見出される。

「大きさの全体を通じて、われわれは1, 2, 3, ---- 10の数によって表される日々の生存資料の価格の規則的な上昇と、同様な数列によって表される地代の対応した増加をわれわれは見出す。—— 購買者によって与えられるものは販売者によっていつも受け取られねばならないという、単純な原理で説明されるべき一致である。」(pp. 96-97)

上記の引用文での「価値」は彼が「価値の観念に関する講義」で意味したものとは異なり、交換価値・価格を意味し、それは生産費、「現存の供給が増加されうる費用によって制限される」。そして、この現存の供給部分を生産する土地あるいはそこでの生産費よりも肥沃な土地あるいはそこでの生産費よりも少なくてすむ「供給の主要部分」には地代が生ずる。

すなわち、農業生産物への需要が増加し、生産・供給を増加すれば、最劣等地＝限界地の生産費によって生産物全体の価値が制限され、それよりも肥沃な土地にはその差額に応じた地代が生じる、ということである。これは限界地の生産費が価値を決定するというリカードゥ的な価値・自然価格決定の基本原則と差額地代論の展開に合致する。

しかも、想像上の国の想定から現実のイングランドへの論議を進めるに当たって、ロイドは「われわれは現にある物事についての真の見解に到達できる前に、その帰結が重要であるいまひとつの変更をしなければならない」(p. 62)として、次のような説明を加えている。

「私は食料のすべての購買者の資力が互いに等しいと想定してきたし、[土地の]非占有者の全体がほんの僅かな生存資料のために絶えず労働することを余儀なくされるという、われわれが到達した結論が本質的に依存したのは、この想定に関してである。すべての人の所得が一週10シリングであると想定すると、すべての人が彼らの必要な維持のためにその10シリング全体を費やすことを余儀なくされるだろう。しかし、ある人々の所得が一週10シリングであり、他の人々の所得が連続的数列で、20シリング、30シリング、40シリング、3ポンド、4ポンド、5ポンド等々であるとすれば、このケースは異なるであろう。提供すべき最も多くの貨幣をもつ人々が最初に要求を満たされるであろうことは、明白である。それ故、もし所得の遞減する大きさにおいて、食料の現実の供給が10シリング以上をもつすべての人々——10シリングをもつ人々すべてあるいはほぼすべてを含むが、10シリング以下しかもたない人々はすべて含まない——にとって十分であるならば、食料の稀少の全圧力は10シリングあるいはそれ以下をもつ人々によって支えられるだろう。これらの人々がその全所得を費やしたとき、競争はそれ以上進むことができず、将来の価格上昇は結果として阻止されるだろう。10シリング以上をもつ人々は10シリングあるいはその付近で十分に購買するであろうし、10シリングを超える彼らの所得の余剰全体を他の用途に捧げることができるであろう。」(p. 63)

さらに、「地代に関する講義」では、人口増加に伴って、食料の獲得は困難になるケースを論じて、次のように述べている。

「究極的には、一定の価格が確立されるが、そのとき各個人に割り当てられる食料の分け前は、各人がその価格で購買することができ、その意思がある量に比例しなければならない。」(p. 93)

地代に関する説明はともかくとして、その決定された価格では各個人はその価格での購買

の能力と意思に応じた量を獲得する、と言う。ここには、言葉は出てこないが、「価値観念に関する講義」で触れられた価値の「強度」概念を展開したマルサスの購買者の購買の「能力」と「意思」による限界購買者説的説明と、限界内の購買者には「余剰」が生じることが述べられているのが見出される。

さらに、注目すべきことに、人口がさらに増加していくケースでは、次の説明も見られる。

「さらに同じ推論のやり方を進めて、食料の価格が絶えず上昇し、日々の生存資料と交換に、1時間の労働から2時間の労働へ、2時間の労働から3時間の労働へ等々と、ほぼ人間の本性が可能な最大の労働まで進まねばならないことを証明することは、不必要である。主要な原理を明確に指摘することで十分であり、それは単に次のことである、1オンスの食料に対する空腹な人の食欲は大きい。彼が1オンスを食べた後、第2の1オンスに対する食欲はそれよりも小さい。第3の1オンスに対しては、第2のそれに対するよりもさらに小さい。そして、ついには、彼はそれ以上食べる願望はもたなくなるに至る。この限界を40オンスに決めよう。たまたま彼がただ39オンスのみをすぐに獲得できるとすれば、彼は40番目のオンスについてはほとんど気につけない。それを獲得するのに大いに尽力するよりも、彼はそれを全くなしに済ませるだろう。彼の供給の減少ごとに、ついに、飢餓と戦うときに、彼は乏しい食事を獲得するために、彼が与えることができるすべて、すなわち、彼が与えることができるすべてであるとわれわれが想定する彼の労働すべてを与えるまで、彼の努力は増加するであろう。とすると、人口の前進的な増加とともに、各個人の分け前は比例して減少し、それ故、満たされない願望はより増加するので、減少する分け前の見返りに労働のより大きな部分が絶えず与えられねばならない。」(p. 95)

ここでは、食料の価格が需要の増大に伴う投下労働量の増加によって上昇していくこと、個人の食料に対する欲望の満足は数量が増大するにつれて逡減していくこと、そしてその個人においては欲望満足と彼の与える労働あるいは「努力」が均衡し、欲望を満たすべき数量の減少とともにこの努力が増加することが説明されている。そして、ロイドはその決定される価格について、次のような説明も与えている。

「価格がどの点に落ち着こうと、それはそこで落ち着くことを記憶することだけが重要である。なぜならば、その点で、購買者たちの心の中で、一方での安逸の愛あるいは他の享楽の愛と、他方での一層の食料供給に対する願望の間に、均衡が生じるからである。」(p. 94)

この説明では、決定された価格では購買者たち個々人には心中で均衡が生じており、彼らにおいては「安逸の愛あるいは他の享楽の愛」と「一層の食料供給に対する願望」との一致が存在している。ここには欲望の諸対象物への購買手段の合理的な配分原理としての「限界効用均等法則」や、限界効用と主観的費用の均衡が存在することが示されていると見ることができる。そして、先の引用文と合わせ考えるならば、その価格では彼自身にとっての「余剰」が最大になっていることになる。そして、暗に意味されている右下がりの需要曲線と右上がりである供給曲線の交点では、価格が決定される限界では、食料を生産する側の「地代」という差額と、消費する側での「余剰」が、いずれも最大になっている、ということになる。いわゆる「生産者余剰」および「消費者余剰」の概念をすでにロイドが認識していたことは明らかである<sup>25)</sup>。そして、この需要（曲線）の背景に、個々人における限界効用逓減法則と限界効用均等法則が成立していることが明示的・暗黙的に示唆されていることになる。

このように、1836年のロイドの講義から、価値論・価格論関連の箇所を拾い出したとき、浮かび上がってくる彼の理論的大枠・イメージは次のようなものである。食料の価格は（市場での需要と供給が一致する）限界地の労働量ないし生産費によって決定される。限界地より肥沃な土地では余剰、すなわち地代（生産者余剰）が生じる。その決定された価格では需要側では、各個人に割り当てられる数量は、「各人がその価格で購入することができ、購買の意思がある数量」（p. 93）であり、その数量において、各個人の心の中では「一方での安逸あるいは他の享楽の愛と、他方での一層の食料供給に対する願望の間に、均衡が生じ」ており、それは購買者の能力と意思に一致する。そして、それ以上の価格を提供することのできる購買者には余剰（消費者余剰）が残される。この前提として、この講義でも、部分的説明ではあるが、各個人において食料の増加によって食欲が逓減していくという1833年の講義での説明（「限界効用逓減法則」）が基盤にあり、しかも「限界効用均等法則」も暗示されていると言ってよい。

ここでの生産側に関する説明は、生産・供給量が増加する局面での説明であり、価格は限界生産費によって決定される。一方の需要側の説明は、その（需給均衡）価格での需要側のそれを構成する各主体の主観面の説明である。言い換えれば、交換価値・価格と個人的「価値」の両者の次元が明確に整理・区別することなく、並列的に論じられているように見える。「ロイドにおける価値概念の均衡は、このように一財の主観的特殊効用とそれへの主観的費用の均衡、一財のある価格での需要量と他財の需要量の均衡、そしてそれらに基づく——主観的概念から客観的概念への移転の問題は特に取り上げられないが——市場における限界購

25) Romano (1977), p. 438 および森 (1982), 423頁。

買者と限界生産者との均衡があげられるもの」<sup>26)</sup>であった、と要約されている。ロイドは「より長期的に交換価値あるいは価格の決定を考察しつつ、決定された価格における消費者の均衡を分析したといわねばならないようである」<sup>27)</sup>。とすると、ロイドの価値・価格論には、長期的なリカードウ的な自然価格あるいは交換価値の次元の説明と、それ自体としては十分であるとは言いがたいが、時代を先取りした主観的価値の説明と価格への限界効用理論的接近の萌芽が混在している、ということになる。彼の価値論はその意味で古典派的枠組みに納まるものであり、「ロイドは限界単位と市場価格の関連を詳述するのに失敗しただけでなく、彼の出版された著作は限界主義の発展に、あるいはリカードウ的な費用の強調の衰退に貢献したとは考えることはできない」<sup>28)</sup>、と言うべきであろう。

#### 4. むすび

ロイドのスミス価値論の解釈および彼の他講義の検討で見たように、彼の「特殊的効用」に基づく価値の説明は、リカードウあるいは古典派の価値についての理論的分析の枠内に収まる範囲内での理論展開であり、内部的革新であった、と言ってよい。それまでは深い究明にまでは至っていなかった需要を構成する諸個人の購買・消費行動を一層その根底から、すなわち彼らの行動を引き起こす欲望の次元にまでさかのぼって説明したものであった、というべきものである。そして、それは彼のスミス解釈に基づき、マルサス的な説明に接近したものであり、それを一層深化させたものとも言える。従って、おそらく彼においては、当時の学説に反旗を翻す「革命」的な意識はなかっただろう。その態度は彼のスミス価値論解釈に現れている。ロイドのアイデアの起源は明らかではない<sup>29)</sup>が、「ロイドの理論的装置はリカードウよりもアダム・スミスとマルサスにより負っているように思われるけれども、彼は価値論に関する第二次の文献が信じさせるように導く反リカーディアンではなかつ

26) 森 (1982), 424頁。

27) 森 (1982), 424頁。ゴードン (Gordon, 1966) もロイドの講義自体の詳細な検討はないが、ロイドの価値論を同じように要約している。「均衡における限界費用価格付けの原理、および限界効用逓減法則の明確な説明が存在する。さらに、食料の均衡価格の議論においては、それは、一方での安楽あるいは他の享楽の愛、他方ではより一層の食料供給への願望の間で、購買者たちの心の中に、均衡が生じる (中略) 価格である、と彼は説明している。さらに、ロイドは均衡価格の決定における決定的要因として、限界消費者の観念を導入している。(中略) それから、彼は引き続いて、限界費用価格付けは余剰が限界内生産者たちによってだけでなく、限界内消費者たちによっても引き出されることを意味する、ということを観察している」(p. 69)。ロマーノはこのゴードンの説明を受け入れ、さらに要して引用している。cf. Romano (1977), p. 438.

28) Romano (1977), pp. 438-439.

29) ボーレイ (Bowley, 1967) は、「ロイドの価値に関する講義での文章は、シーニアの原稿講義における、富願望の基礎としての欲望の変動、および供給が増加するにつれての商品の意義の逓減に関する並行的な文章に非常によく似ているので、彼がシーニアの仕事を知らなかったと信じるのは不可能である」(pp. 108-109) と、シーニアからの影響を推測している。

た」<sup>30)</sup>というべきであろう。このことは、人口や救貧法に対するロイドの議論の基本的態度からも容易に想像されるところでもある。そうであるとすれば、ロイドを「効用の価値に対する関係についての体系的説明、ならびにそれに伴う生産費説の健全な批判」<sup>31)</sup>を行い、「古典派体系からの転換上の決定的な契機を画したジェヴォンズ (W. S. Jevons) の先行者」<sup>32)</sup>として評価するT. W. ハチソン (Hutchison, 1953) や、外見的な限界効用理論の提示のみに注目して、「限界革命」の先駆者として強調する類似の通説的な説明はミス・リーディングということになるだろう。

### 参考文献

- Blaug, M. (1962) *Economic Theory in Retrospect*, Irwin, (杉原四郎・宮崎犀一訳『経済理論の歴史 中』東洋経済新報社).
- (ed.) (1986) “Lloyd, William Forster,” in *Who's Who in Economics. A Biographical Dictionary of Major Economists 1700-1986*. Second Edition, Wheatsheaf Books.
- Bowley, M. (1967) *Nassau Senior and Classical Economics*, Octagon Books (1937).
- (1972) “The Predecessor of Jevons — the Revolution that wasn't,” *Manchester School of Economics and Social Studies*, Vol.40, No.1
- Clerke, A.M. (1909) “Lloyd, William Forster (1794-1852),” L. Stephen and S. Lee (eds.), *Dictionary of National Biography*, Vol.11, Smith, Elder, & Co.
- Clerke, A.M., rev. Alan Yosioka (2004) “Lloyd, William Forster (1794-1852),” in H.C.G. Matthew and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, Vol. 34, Oxford University Press.
- Gilbert, G., (1986) “W.F. Lloyd and Socialism: A Note,” *Australian Economic Papers*, Vol. 25.
- Gordon, B.J. (1966) “W.F. Lloyd: A Neglected Contribution,” *Oxford Economic Papers*, N.S. Vol. 18, No. 1.
- (1987) “Lloyd, William Forster (1794-1852),” in J. Eatwell, M. Milgate and P. Newman (eds.), *The New Palgrave Dictionary of Political Economy*, Macmillan and MARUZEN, Vol. 3.
- Harrod, R.F. (1927) “An Early Exposition of “Final Utility.” W.F. Lloyd's Lecture on “The Notion of Value” (1833) Reprinted,” *Economic History* (Supplement to the *Economic Journal*), No.2.
- (1933) “Lloyd, William Forster (1794-1852),” in E.R.A. Seligman and A. Johnson (eds.), *Encyclopaedia of the Social Sciences*, Vol. 9, Macmillan.
- Hutchison, T.W. (1953) *A Review of Economic Doctrines 1870-1929*, Clarendon Press, (長守善・山田雄三・武藤光朗訳『近代経済学説史 上巻』東洋経済新報社).
- Levy D.M. and S.R. Peart (2004) “Lloyd, William Forster (1794-1852),” in D. Rotherford (Editor-in-Chief), *The Biographical Dictionary of British Economists*, Vol. 2, Thoemmes Continuum.
- Lloyd, W.F. (1968) *Lectures on Population, Value, Poor-Laws, and Rent: delivered in the University of Oxford during the years 1832, 1833, 1834, 1835, 1836, by the Rev. W.F. Lloyd*, Augustus M. Kelley (Reprints of Economic Classics).
- (1980) “W.F. Lloyd on the Checks to Population,” *Population and Development Review*, Vol. 6, No. 3.
- Romano, E.M. (1971) “W.F. Lloyd — A Comment,” *Oxford Economic Papers*, N.S. Vol.23, No.2.
- (1975) “The Search for William Forster Lloyd's Papers,” *History of Economic Thought newsletter*, No. 14.
- 
- 30) Romano (1977), p. 440. この結論は、そのタイトル「ジェヴォンズの先行者たち —— 革命はなかった」が示すように、ロイドをも検討対象にしたボーレイ (Bowley, 1972) のロイド評価でもある。なお、ボーレイはそれ以前の著作 (Bowley, 1937) では異なった見解をとっていた。
- 31) Hutchison (1953), p. 14, 18頁。
- 32) Hutchison (1953), p. 14, n. 1, 18頁注。なお、ハチソンはホエートリー、シーニア、ロイドを「オクスフォード効用学派」と名づけている。

- (1977) “William Forster Lloyd — a non-Ricardian?,” *History of Political Economy*, Vol. 9, No.3.
- Schumpeter, J.A. (1954) *History of Economic Analysis*, Oxford University Press (東畑精一訳『経済分析の歴史』岩波書店).
- Seligman, E.R.A. (1903) “On Some Neglected British Economists,” *Economic Journal*, Vol. 13 (平瀬巳之吉訳『忘れられた経済学者たち』(社会科学ゼミナール4) 未来社).
- Smith, J.G. (1935) “Some Nineteenth-Century Irish Economists,” *Economica*, N.S. Vol. 2, No.5.
- 井上琢智 (1987) 『ジェヴォンズの思想と経済学——科学者から経済学者へ——』日本評論社。
- 森茂也 (1982) 『イギリス価格論史——古典派需給論の形成と展開——』同文館。



## Summary

### ON W. F. LLOYD'S VALUE THEORY

SHOICHIRO UEMIYA

W. F. Lloyd (1794-1852) has conventionally been viewed as one of the precursors of marginal utility theory after Seligman drew attention to a group of neglected English economists of the 1820s and 1830s. His *A Lecture on the Notions of Value* (1833), however, has seldom been examined in detail with the exception of only a few historians. This article analyzes Lloyd's 1833 lecture which clearly contains a conception of marginal utility, a statement of the law of diminishing marginal utility, and a suggestion of the law of equi-marginal utilities.

In this lecture Lloyd defined "value" as "the importance of an object to the person possessing it" and termed it "special utility". Though he distinguished "value" from "value in exchange" or price, he did not show a clear relation between them. He interpreted that Adam Smith had also used the term value in this sense from an examination of Book I, chapters 5 and 8 of the *Wealth of Nations* where it was said that value "depends on the difficulty of attaining it". How is this explanation to be interpreted?

Lloyd's other published lectures, especially his *Two Lectures on the Justice of Poor-Laws and One Lecture on Rent* (1836), included points of interest on this problem. He clearly explained the principle of marginal cost pricing in equilibrium, a differential theory of rent, the law of marginal utility in the mind of consumer as developed in the 1833 lecture, and consumers' and producers' surplus. He was not an incisive attacker of labour and cost-of-production theories.

From these examinations, his explanation of marginal utility theory seems to fit well within the classical analytical framework, although he failed to elaborate on the connection between marginal utility and price, and that between individual consumption and market demand. He does not seem to have consciously opposed the classical system with its emphasis on the utility theory of value over cost or labour theory. In this sense, the uncritical, or unconditional, conventional representation of Lloyd as a precursor of the "Marginal Revolution" is misleading.